

小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（2）

河田 弘幸*

はじめに

前稿では、小又川流域における縄文時代前期から中期の竪穴住居跡について論じた。当該地域における縄文時代前期の竪穴住居跡を検出した遺跡は5遺跡、中期の竪穴住居跡を検出した遺跡は18遺跡あり、小集落が分散して存在していた。竪穴住居の平面形は、円形または楕円形を基調としており、森吉家ノ前A遺跡の前期後葉と考えられる大型住居跡や同じく前期後葉の小型の住居が多い二重鳥C遺跡で竪穴住居の規模に特徴が見られる。前期中葉の円筒下層a式期から中期中葉の円筒上層e式期の竪穴住居には、一般的に地床炉が伴うが、漆下遺跡では、前期中葉に円筒下層a式土器を使用した土器埋設炉が屋外炉として出現し、中期前葉から中期中葉には土器埋設炉や土器片囲炉を有する竪穴住居もある。中期後葉には、複式炉が一般化し、複式炉→立石+地床炉→立石+土器埋設炉の変遷が見られる。深渡遺跡と深渡A遺跡では、複式炉を有する竪穴住居を廃絶する際に、壁際に礫を配する廃絶儀礼が行われた住居が検出された。これらは、後期前葉に見られる配石遺構の祖形と考えられる。

本稿では、前稿の続きとして縄文時代後期から晩期にかけての竪穴住居跡について論ずる。

1 縄文時代後期の竪穴住居跡

後期の遺跡は、上悪戸A遺跡、上悪戸C遺跡、上悪戸D遺跡、桐内A遺跡、桐内B遺跡、桐内C遺跡、桐内D遺跡、桐内沢遺跡、姫ヶ岱A遺跡、姫ヶ岱B遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、橋場岱B遺跡、橋場岱C遺跡、橋場岱G遺跡、上ハ岱A遺跡、上ハ岱B遺跡、漆下遺跡、二重鳥A遺跡、二重鳥B遺跡、二重鳥C遺跡、二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥F遺跡、二重鳥G遺跡、二重鳥H遺跡、向様田B遺跡、向様田C遺跡、向様田E遺跡、向様田F遺跡、惣瀬遺跡、天津場A遺跡、天津場B遺跡、天津場C遺跡、ネネム沢A遺跡、ネネム沢B遺跡、森吉家ノ前A遺跡、森吉家ノ前B遺跡、森吉家ノ前C遺跡、森吉A遺跡、森吉B遺跡、地蔵岱遺跡、地蔵岱A遺跡、鷺ノ瀬遺跡、羽岱遺跡、碎済遺跡、深渡遺跡、深渡A遺跡、丹瀬口遺跡、桂の沢遺跡がある。これらの遺跡の中で、漆下遺跡は検出した遺構数・出土遺物から当地域において後期の最大級の遺跡である。後期の竪穴住居跡を検出した遺跡は、桐内A遺跡5軒（後葉）、桐内C遺跡4軒（不明）、姫ヶ岱D遺跡1軒（後葉1・中期末葉から後期初頭は含まず）、日廻岱B遺跡29軒（前葉）、漆下遺跡14軒（前葉5・中葉4・後葉3・不明2）、二重鳥C遺跡2軒（前葉以前1・前葉1）、二重鳥D遺跡12軒（後葉）、二重鳥E遺跡6軒（後葉）、向様田D遺跡1（中葉）、向様田E遺跡1（不明）向様田F遺跡2軒（後葉～晩期初頭）、碎済遺跡1（後葉）、深渡遺跡1（前葉）である。

検出した竪穴住居の床面積は、 10 m^2 未満3軒、 $10\sim20\text{ m}^2$ 37軒、 $20\sim30\text{ m}^2$ 16軒、 $30\sim40\text{ m}^2$ 4軒であり、前葉・中葉・後葉における床面積には、時期ごとの特徴は見られない。平面形は、姫ヶ岱D遺跡S I 40のみが不整形と報告されているが、その他は円形または楕円形を基調とする。住居は4～6基の主柱穴で構築されている場合が多く、並んで3軒検出された桐内C遺跡の住居跡の主柱穴は7

* 秋田県埋蔵文化財センター北調査課学芸主事

基または8基であり、円形に配置される。また、漆下遺跡S I 170と二重鳥D遺跡S I 40のように壁柱穴が巡るものもある。

検出した後期の竪穴住居跡81軒（桂の沢遺跡を除く）のうち炉を伴う住居は65軒ある。炉の形態は、地床炉12、地床炉→石囲炉（炉の作り替え）1、石囲炉15、石囲炉→地床炉（炉の作り替え）1、^(註3)土器埋設炉20、立石+地床炉（立石炉）2、立石+土器埋設炉（土器埋設炉立石炉）13、石組+土器埋設炉1、石囲土器埋設炉1、石組炉1、土器片囲炉1である。^(註4)

前葉の竪穴住居跡は、日廻岱B遺跡で29軒、漆下遺跡で5軒、二重鳥C遺跡で2軒、深渡遺跡で1軒検出された。この時期の住居に伴う炉は、石囲炉1、土器埋設炉17、立石+地床炉1、立石+土器埋設炉13、石組+土器埋設炉1、石組炉1であり、地床炉を作り替えている炉もある。土器埋設炉や立石+土器埋設炉を伴う住居跡は日廻岱B遺跡でまとまって検出されており、漆下遺跡でも立石+土器埋設炉を伴う住居跡を検出している。炉は住居中央に構築している場合が多い。姫ヶ岱D遺跡で検出されたS I 40の床面積は7m²と小さく、平面形はやや不整な橢円形を呈する。柱穴と炉は検出されていない。二重鳥C遺跡で検出されたS I 39・124の床面積はそれぞれ12m²と16m²であり、平面形はどちらも円形を呈する。壁高は17cmと45cmであり、S I 124が深く掘り込まれている。S I 39は8基の柱穴が検出されており、P 3とP 4は入口に伴う柱穴の可能性があるという。^(註5)炉の形態は石組+土器埋設炉であり、住居中央に構築されている。S I 40は7基の柱穴が検出されたが、入口に伴う柱穴はなく、炉も検出されていない。深渡遺跡で検出したS I 95の床面積は10m²で平面形は円形を呈する。柱穴は住居の掘り込みの外側に6基検出された。住居中央には2個の大きい川原石が出土したが、炉は検出されていない。住居内より、4単位の小突起を有し口縁に沿って2条の撲糸圧痕を施文する深鉢形土器である。突起下部にリング状の貼付を配し、リング状の貼付より1条の撲糸圧痕が垂下する。この土器は日廻岱B遺跡で出土している土器と類似し、当時期における地域性を伺わせる土器である。

中葉の竪穴住居跡は、漆下遺跡で5軒、向様田D遺跡で1軒が検出された。中葉の住居に伴う炉は、地床炉2、石囲土器埋設炉1である。漆下遺跡では、遺跡中央南側の低位段丘面で重複した6軒の住居跡が検出され、そのうちの4軒が中葉の所産である。床面積は5～16m²（推定）で、平面形は円形または橢円形を呈する。いずれの住居跡からも主柱穴は検出されていない。炉を検出した住居跡は、S I 168とS I 204であり、どちらも住居中央に地床炉をもつ。S I 975はS T 101捨て場上面に作られており、住居西側の壁と床面の一部を検出した。平面形は橢円形を呈すると考えられ、柱穴5基と壁柱穴をもつ。炉は検出されなかった。漆下遺跡で検出した住居跡は、出土遺物から十腰内3式期に構築されたと考えられる。向様田D遺跡のS I 12の床面積は16m²で円形を呈する。住居中央には川原石を円形に配し、正位に埋設した石囲土器埋設炉を構築している。

後葉の竪穴住居跡は、桐内A遺跡で5軒、姫ヶ岱D遺跡で1軒、漆下遺跡で2軒、二重鳥D遺跡で12軒、二重鳥E遺跡で6軒、向様田F遺跡で2軒、碎済遺跡で1軒が検出された。後葉の住居に伴う炉は、地床炉9、地床炉→石囲炉1、石囲炉12、石囲炉→地床炉1、土器片囲炉1であり、地床炉と石囲炉が一般的になる。すべての炉は住居ほぼ中央部に位置する。石囲炉は基本的に河原石を円形に配する。桐内A遺跡で検出した竪穴住居跡の床面積は、12～29m²であり、平面形は円形または橢円形を呈する。住居中央には円形の石囲炉をもつ。S I 32は6基の柱穴が、S I 37は4基の柱穴が住居

掘り込みの外に巡る。その理由として、床面から柱穴を掘り下げるとき地山砂礫中の礫の含有率が顕著になりさらに掘り下げることが困難になることから、掘り込み易い周縁部に設置した可能性を挙げている。^(註6) 漆下遺跡では、中葉の住居と重複して2軒の住居跡が検出された。床面積は、10 m²と17 m²であり、平面形は楕円形を呈する。主柱穴は検出されず、S I 170の一部には壁柱穴が巡る。S I 170は住居中央に地床炉と石囲炉をもつが、地床炉から石囲炉に作り替えられている。S I 204は住居中央に地床炉をもつ。出土土器から十腰内4式期に構築されたと考えられる。向様田F遺跡では、後期後葉から晩期前葉に位置づけられる竪穴住居跡が2軒検出された。どちらも平面形は楕円形を呈し、床面積はS I 01が18 m²、S I 02が29 m²である。柱穴はS I 02で8基検出している。S I 01の中央はわずかに褐色に変色しており、S I 02の中央には礫が半環状に巡るが、いずれも地床炉または石囲炉とは判断できないとしている。^(註7) S I 02の東壁際には長さ3.5mにわたり壁溝が巡るが、壁溝を伴う住居は他の遺跡では検出されていない。なお、放射性炭素年代測定結果は、S I 01は2920±50BP、S I 02は3240±60BPであり時期差を示す。碎削遺跡でも後葉の住居跡が1軒検出されている。検出されたS I 94は、大半が攪乱等で消失しているが、平面形は径4~5mの略円形を呈すると考えられる。柱穴は7基検出されたが、明確な柱配置にはなっていない。住居中央には、長軸62cm、短軸52cmの楕円形を呈する土器片囲炉が構築されている。浅く掘り窪めた底面中央に大型の凹んだ礫を設置し、周囲には中型の円礫を敷き詰めて火床面としている。壁には同一個体の深鉢形土器破片を突き立てて並べている。また、二重鳥D遺跡と二重鳥E遺跡では合わせて18軒の住居跡が検出されている。

2 縄文晩期の竪穴住居跡

晩期の遺跡は、上悪戸C遺跡、上悪戸D遺跡、桐内A遺跡、桐内B遺跡、桐内C遺跡、桐内D遺跡、姫ヶ岱A遺跡、姫ヶ岱B遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、橋場岱B遺跡、橋場岱C遺跡、橋場岱D遺跡、橋場岱F遺跡、上ハ岱A跡、上ハ岱B遺跡、二重鳥A遺跡、二重鳥B遺跡、二重鳥C遺跡、二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥G遺跡、水上ミ遺跡、向様田A遺跡、向様田B遺跡、向様田C遺跡、向様田D遺跡、向様田E遺跡、向様田F遺跡、ネネム沢C遺跡、森吉家ノ前B遺跡、棚岱、深渡遺跡、深渡A遺跡、桂の沢遺跡がある。その中で、向様田A遺跡、向様田D遺跡は遺物の出土量から当地区の晩期の最大級の遺跡である。これらの遺跡のうち、検出された晩期の竪穴住居跡は、姫ヶ岱D遺跡2(前葉)、日廻岱B遺跡1(前葉)、二重鳥E遺跡4(前葉3・後葉1)、深渡遺跡1(中葉)である。^(註8)

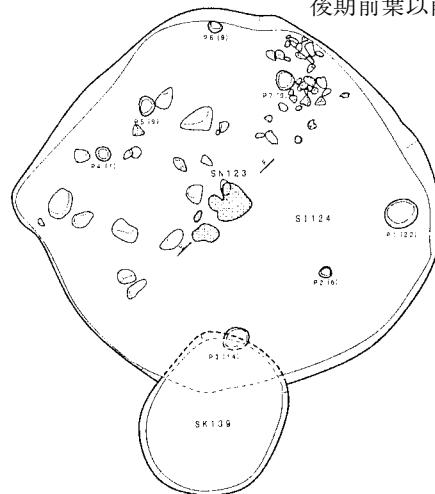
前葉の竪穴住居跡は、姫ヶ岱D遺跡で2軒、日廻岱B遺跡で1軒、二重鳥E遺跡で3軒、深渡遺跡で1軒が検出された。姫ヶ岱D遺跡で検出された2軒の住居の床面積は、S I 04が7 m²、S I 05が9 m²と小さく、平面形はどちらも円形を呈する。S I 04では住居掘り込み外から2基の柱穴が検出された。炉の形態は、S I 04が石囲炉、S I 05は石囲土器埋設炉と土器埋設炉が住居中央に構築される。どちらの石囲も河原石を円形に配する。石囲土器埋設炉の土器は胴部上半を欠損しており、土器埋設炉の土器は口縁部と底部を欠損している。どちらも粗製土器であり、正位に埋設している。S I 05の石囲土器埋設炉と土器埋設炉は隣接しており、炉の作り替えか併存していたのかははっきりしない。日廻岱B遺跡で検出された竪穴住居跡の床面積は10 m²で、平面形は楕円形を呈する。住居中央に石囲炉が構築されており、炉の礫は二重に配されている。炉の中央部には扁平な巨礫が入れられてお

り、住居の廃絶儀礼と考えられる。ただし、本住居は石囲炉に焼土がないこと、礫にも被熱痕がいられないことから配石遺構の可能性もあるとしている。^(註9)二重鳥E遺跡で検出された3軒の住居跡の床面積は10～14m²であり、平面形はすべて橢円形を呈する。主柱穴は、S I 26は3基、S I 35は4基検出されているが、S I 26は南側が削平されており本来は4本柱の可能性もある。また、S I 34は10基の柱穴が検出されているが、明確な柱配置にはなっていない。炉の形態は、S I 26は土器埋設炉、S I 34は掘込炉、S I 35は石囲炉であり、それぞれ住居中央に構築される。石囲炉は河原石を円形に配している。S I 26の埋設土器は、口縁部を沈線で区画し区画内に刺突文を巡らす完形の土器である。深渡遺跡で検出された住居跡は、北半が削平されているが、平面形は橢円形を呈すると考えられる。住居ほぼ中央に地床炉を有し、壁際には壁柱穴が巡る。

後葉の竪穴住居跡は二重鳥E遺跡で1軒検出された。検出された住居の床面積は10m²で、平面形は橢円形を呈する。柱穴は、床面で9基、掘り込み外で2基検出されており、床面の4基が主柱穴である。住居中央に地床炉をもつ。

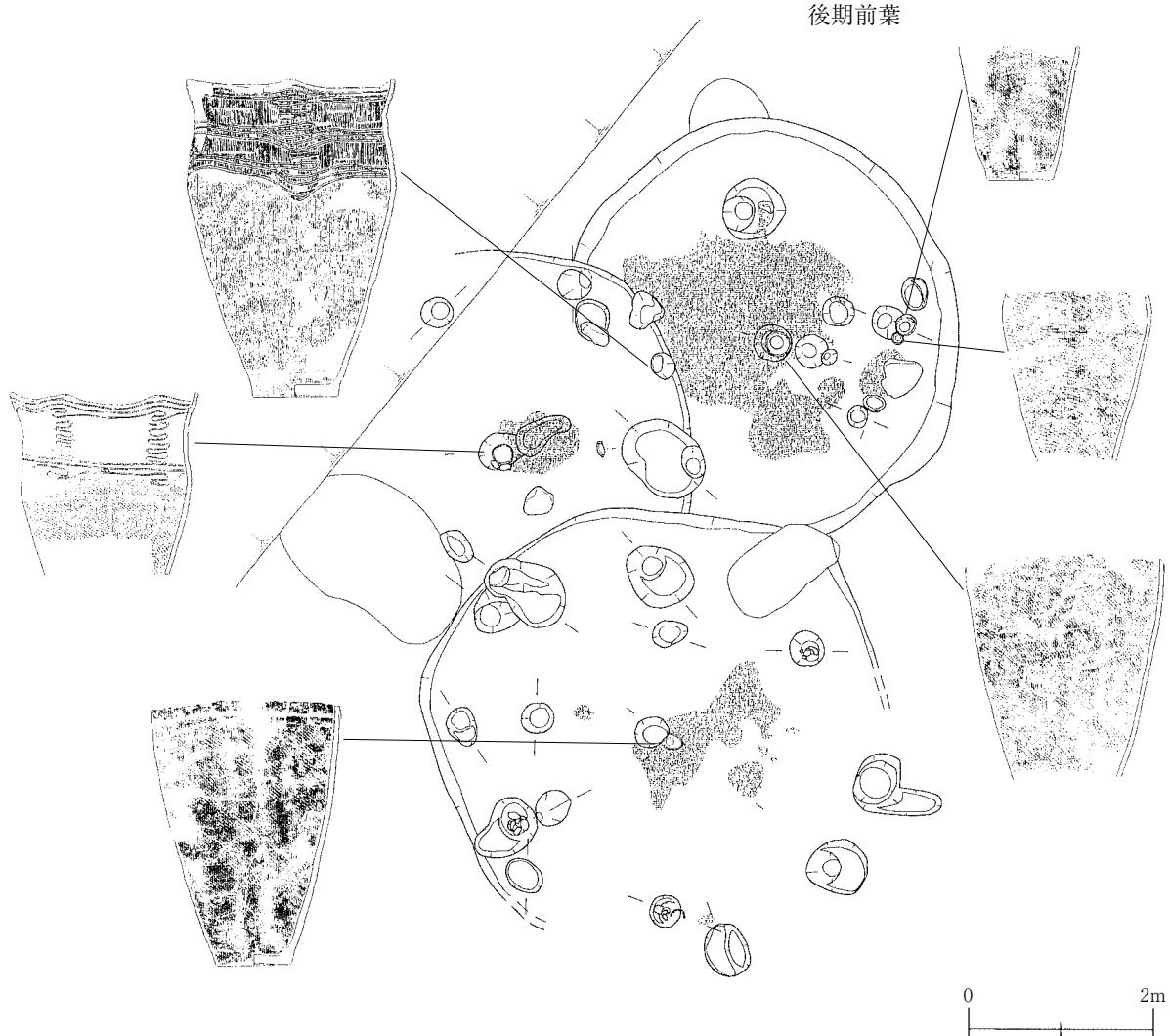
二重鳥C SI124

後期前葉以前



日廻岱B SI2001・2005・2042

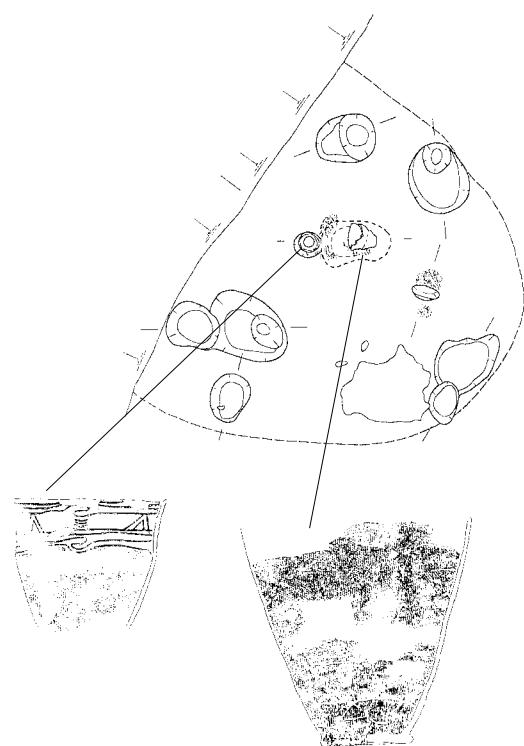
後期前葉



第1図 検出された竪穴住居跡

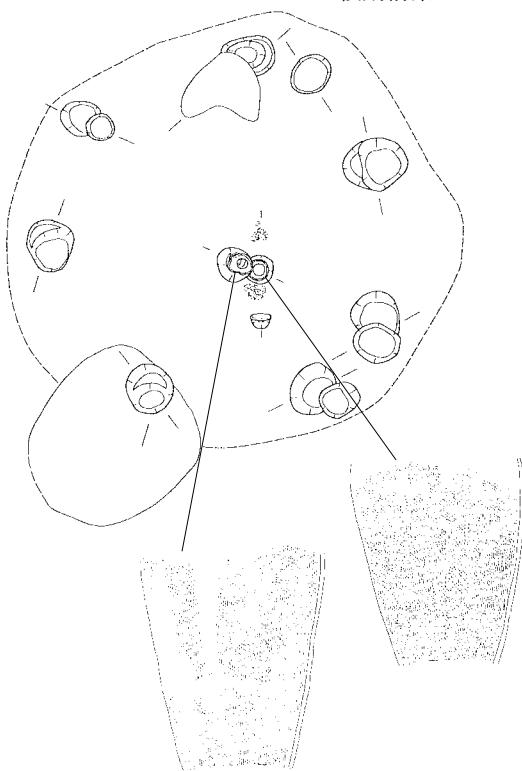
日廻岱B SI2007

後期前葉



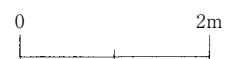
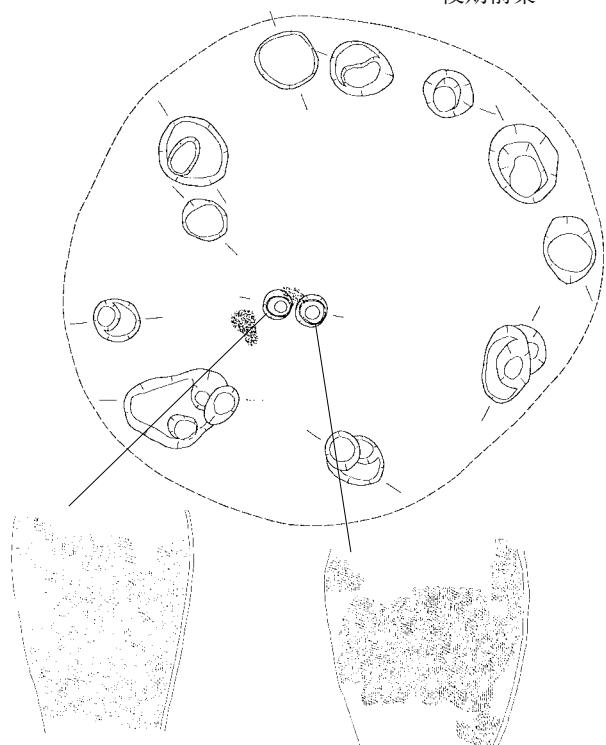
日廻岱B SI2017

後期前葉

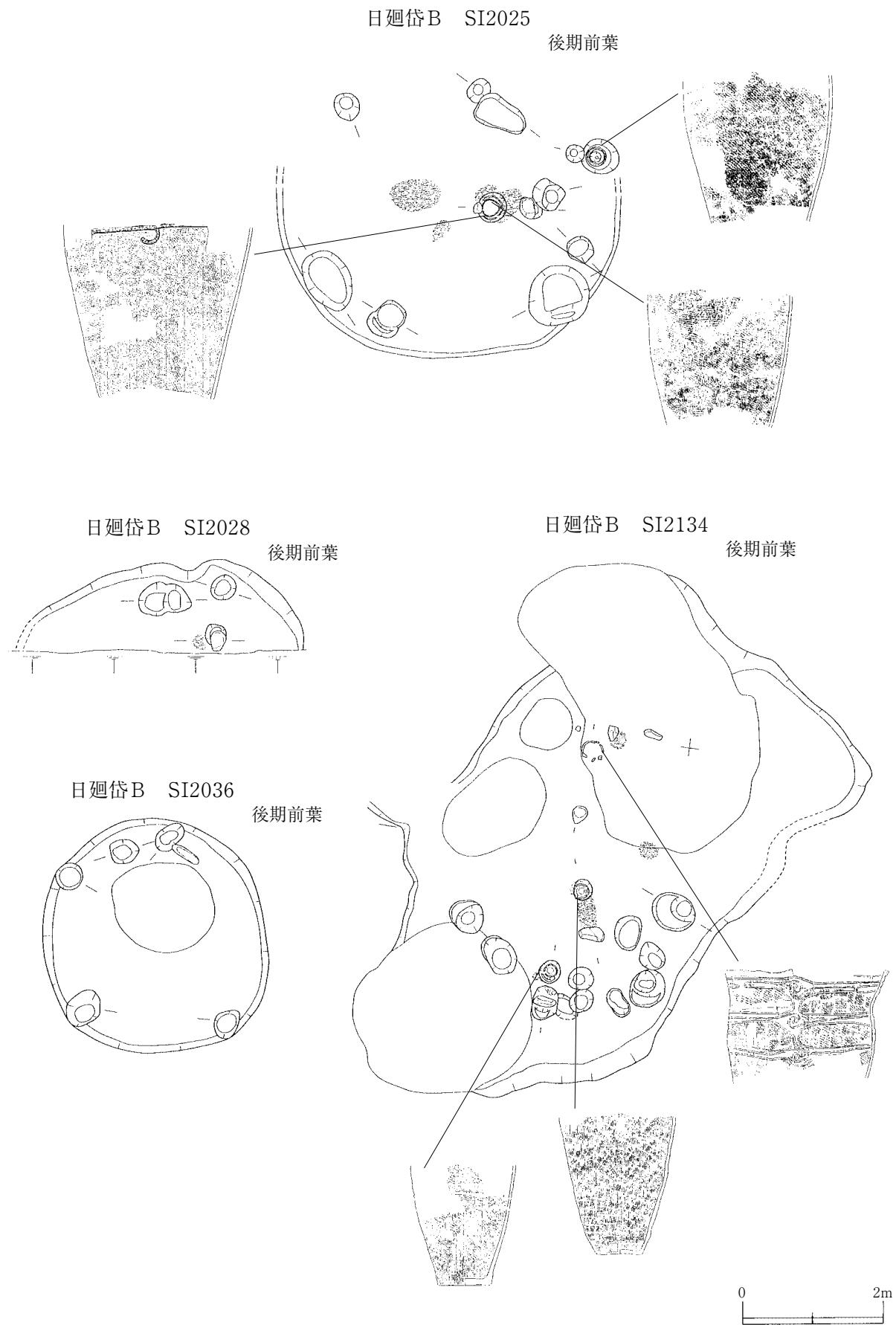


日廻岱B SI2019

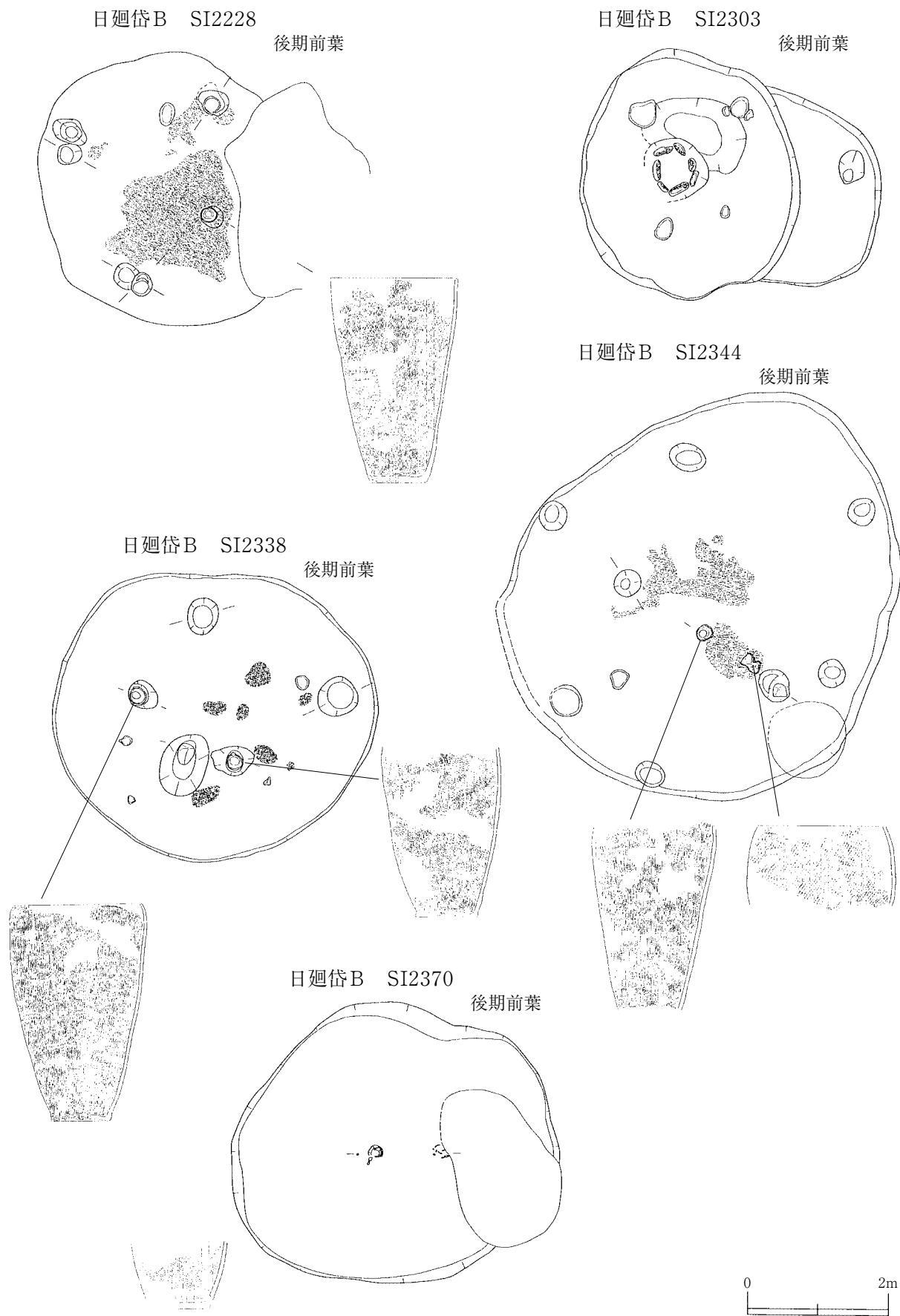
後期前葉



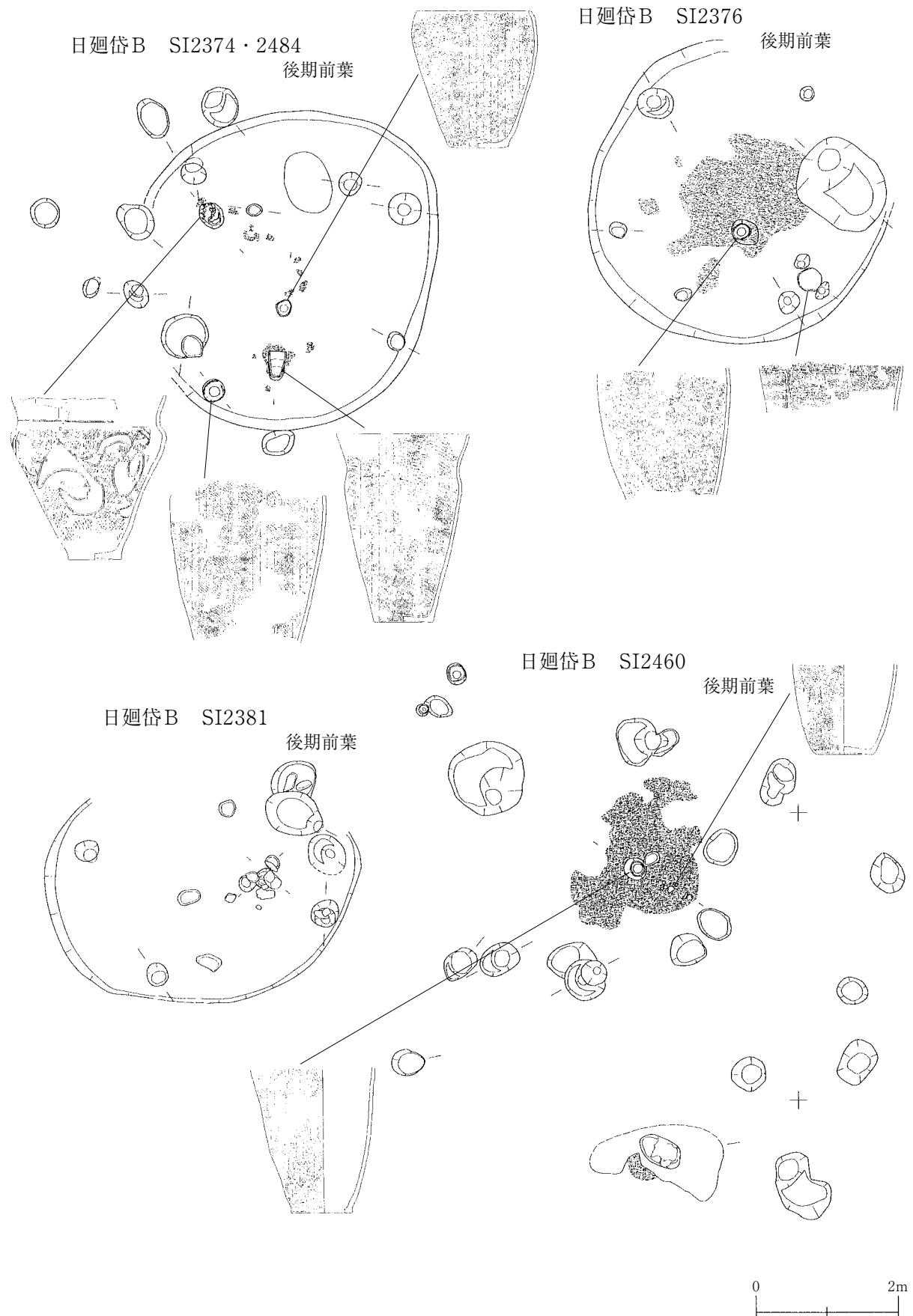
第2図 検出された竪穴住居跡



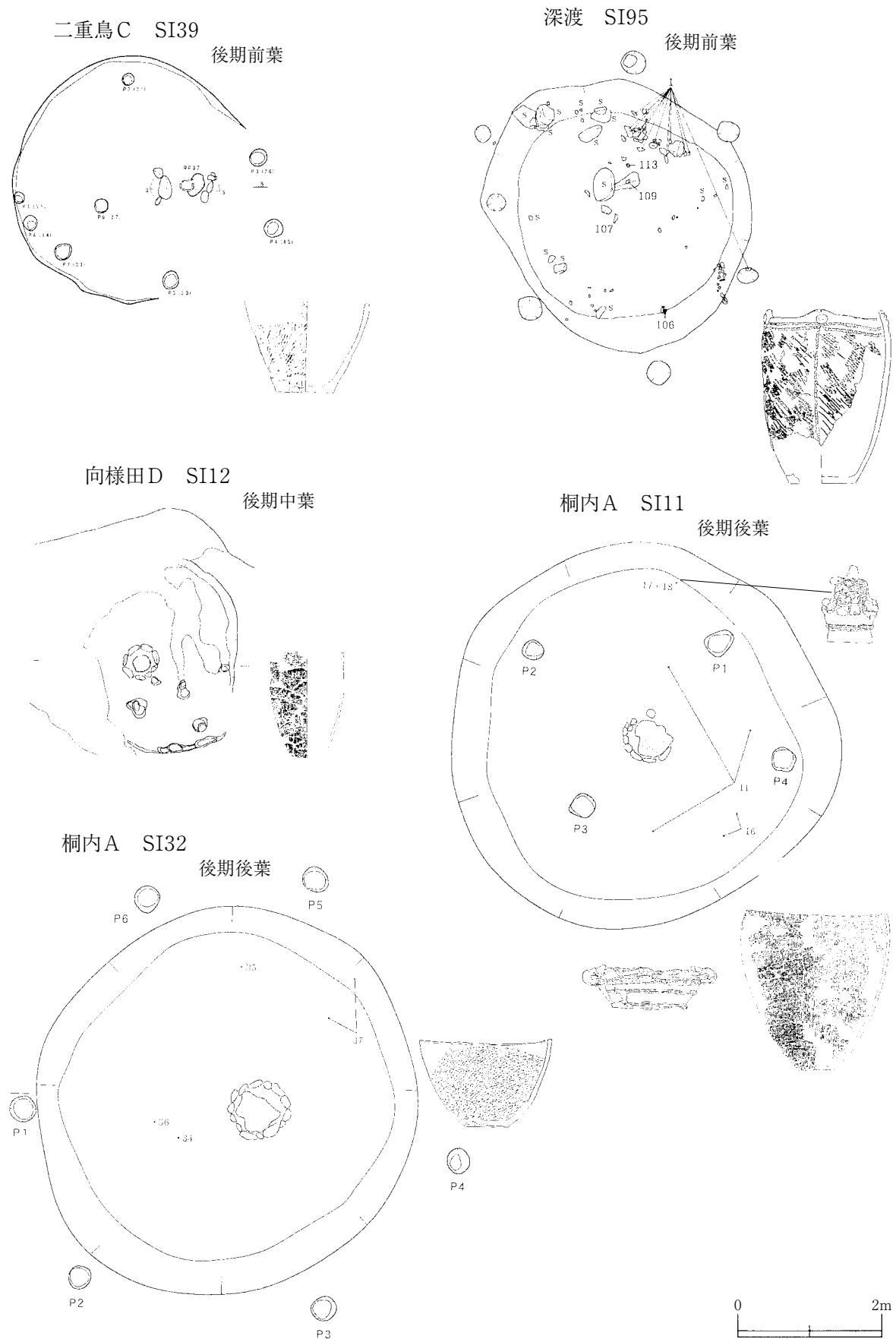
第3図 検出された堅穴住居跡



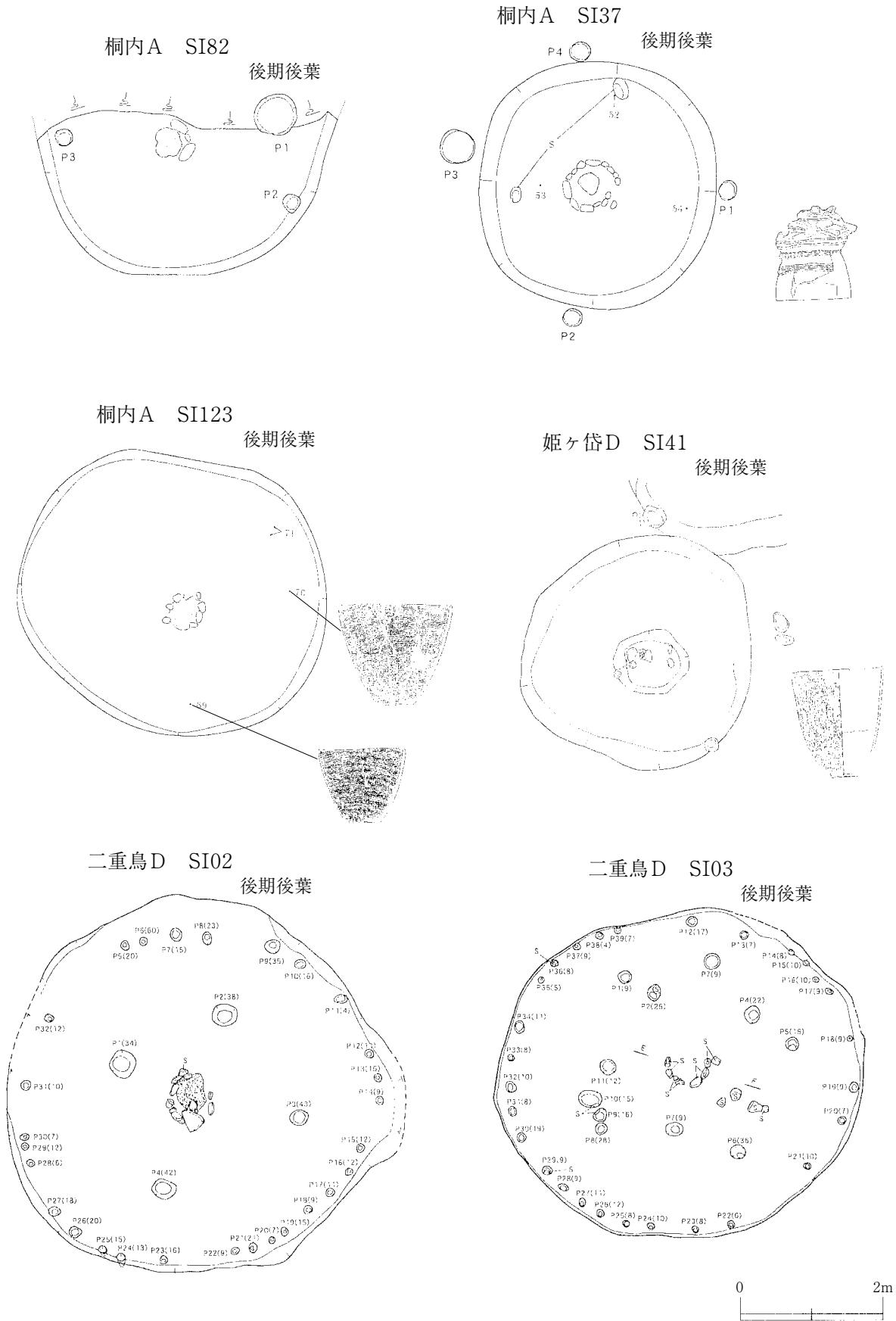
第4図 検出された竪穴住居跡



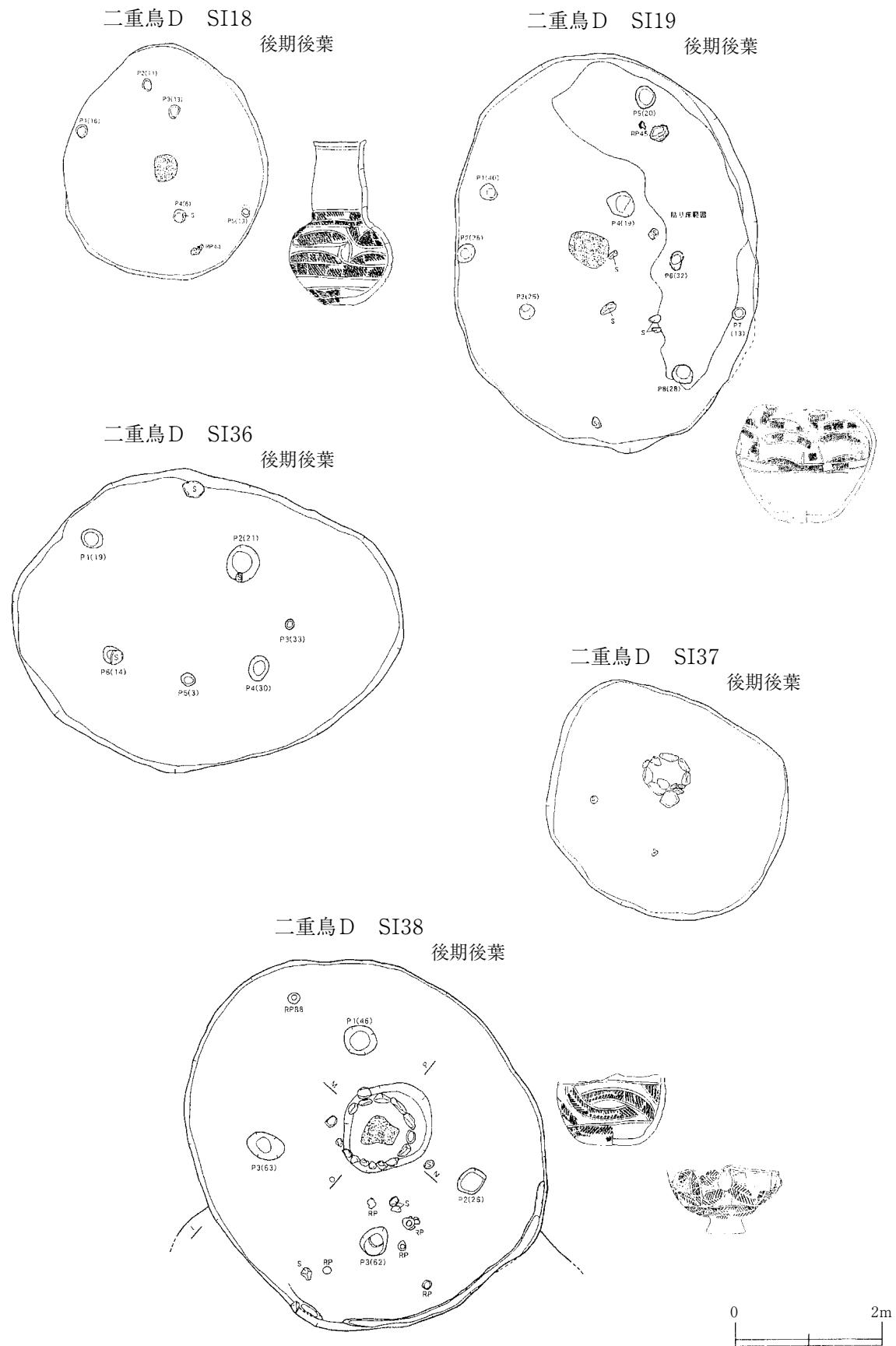
第5図 検出された竪穴住居跡



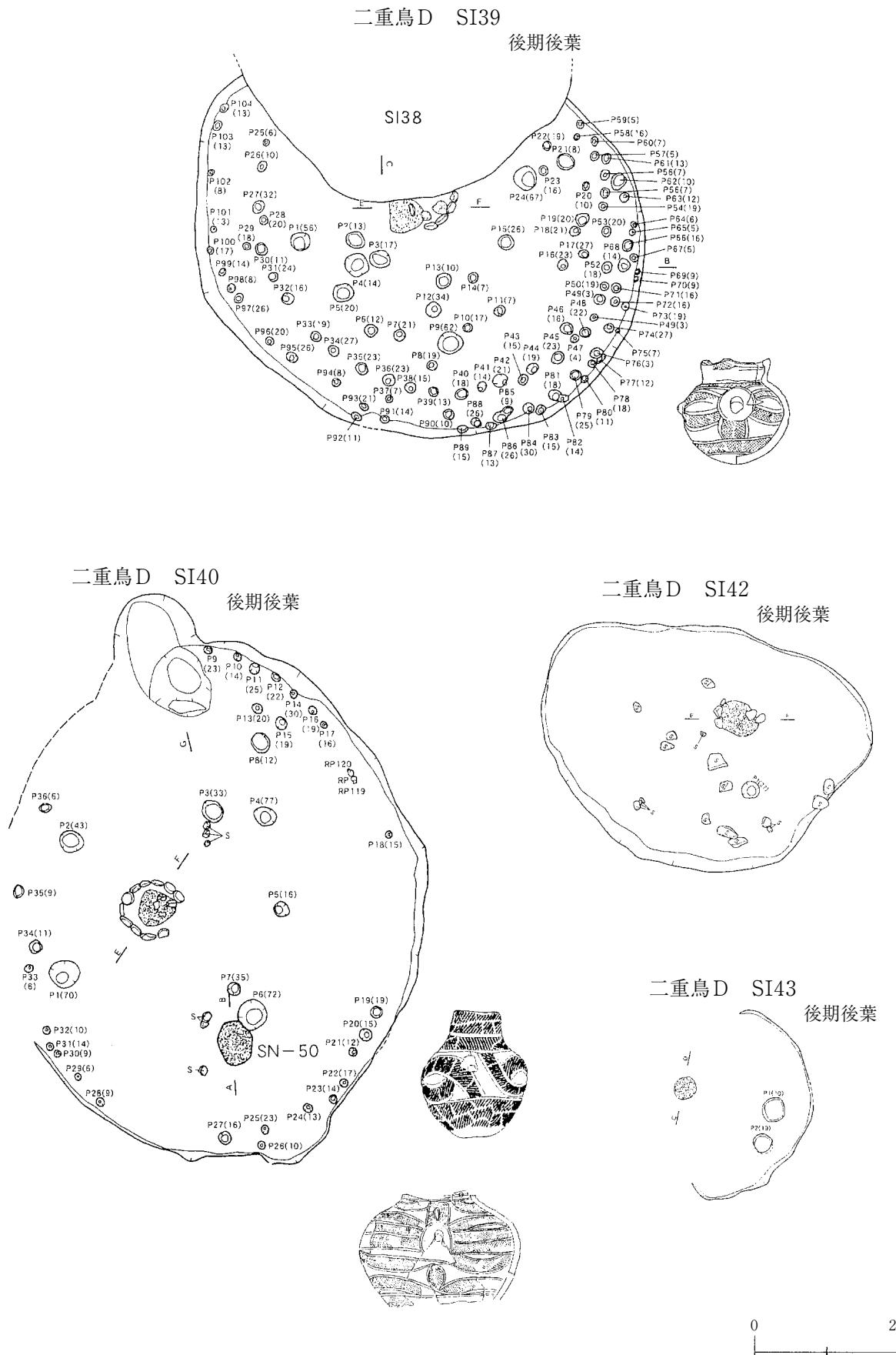
第6図 検出された竪穴住居跡



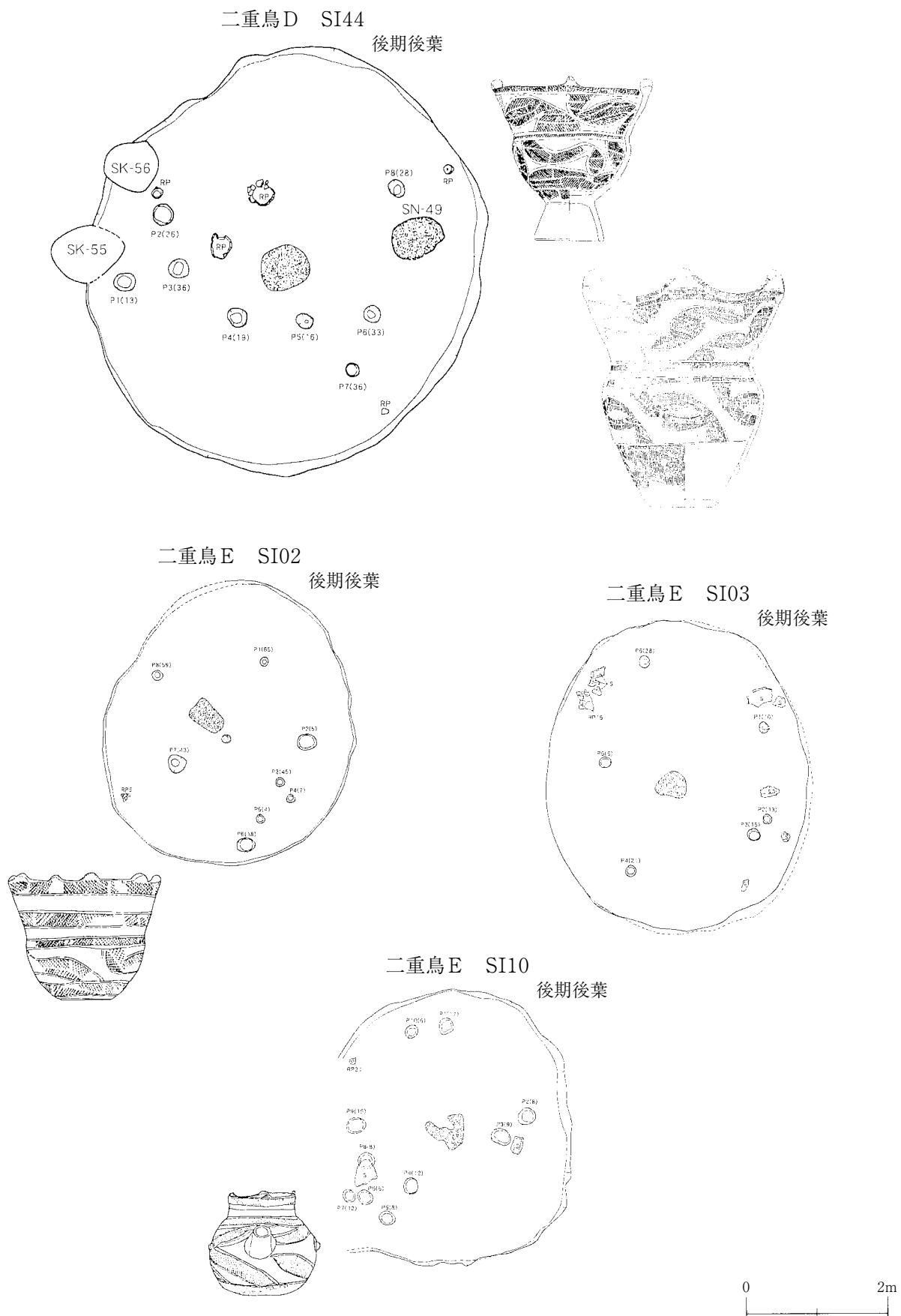
第7図 検出された竪穴住居跡



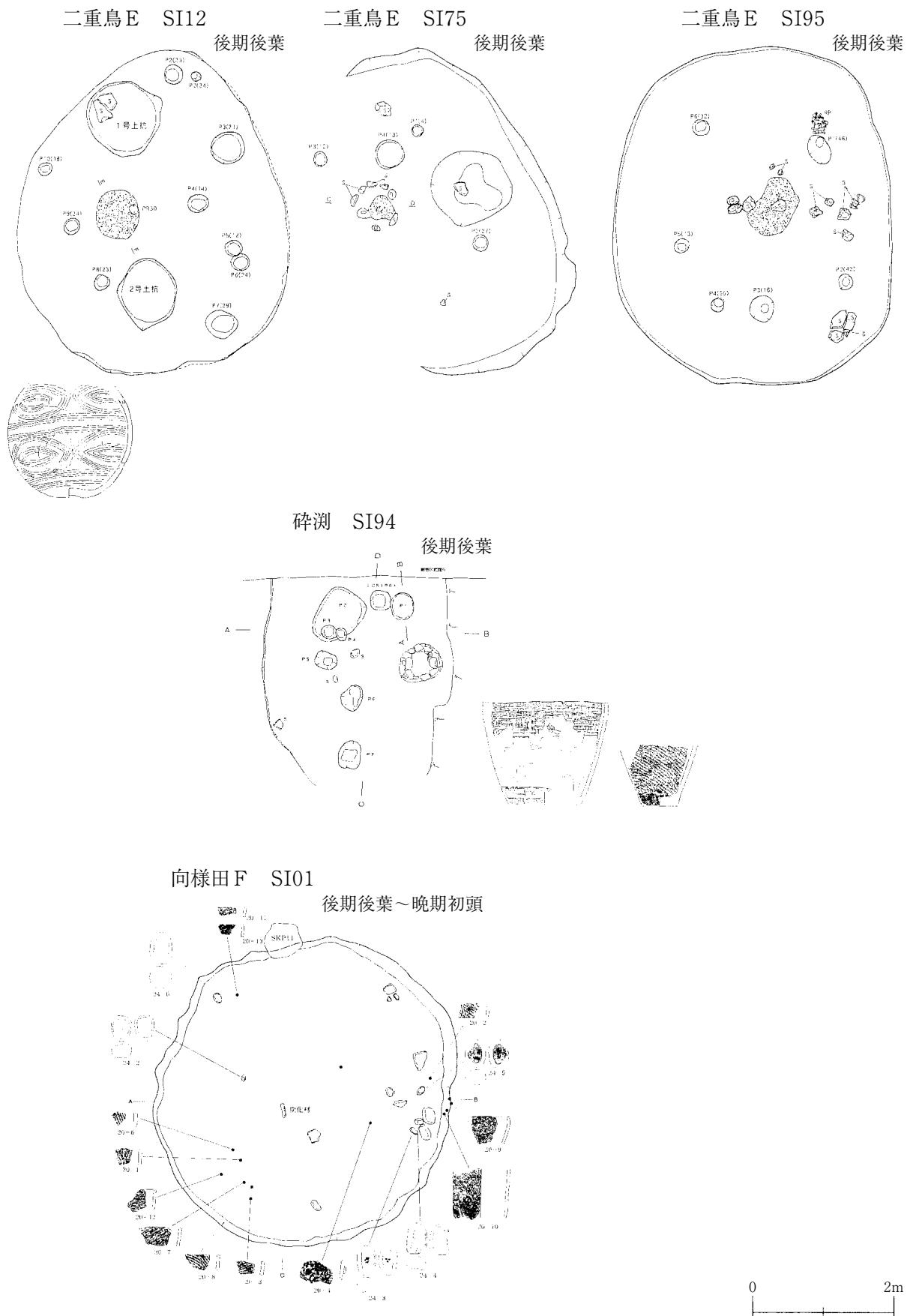
第8図 検出された竪穴住居跡



第9図 検出された竪穴住居跡



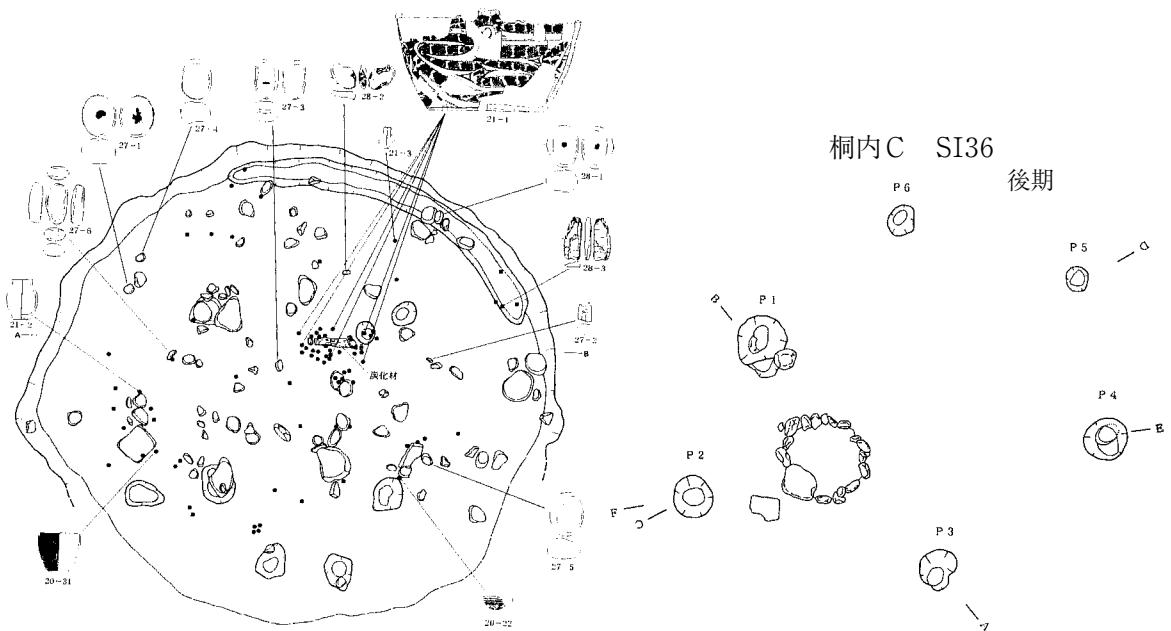
第10図 検出された竪穴住居跡



第11図 検出された竪穴住居跡

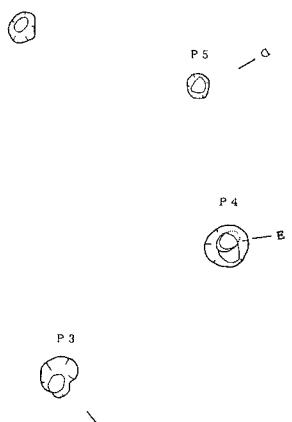
向様田F SI02

後期後葉～晚期初頭



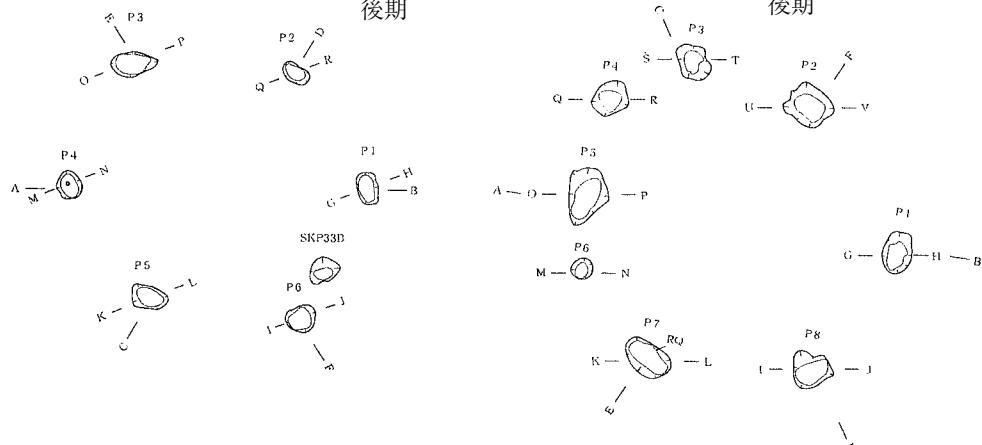
桐内C SI36

後期



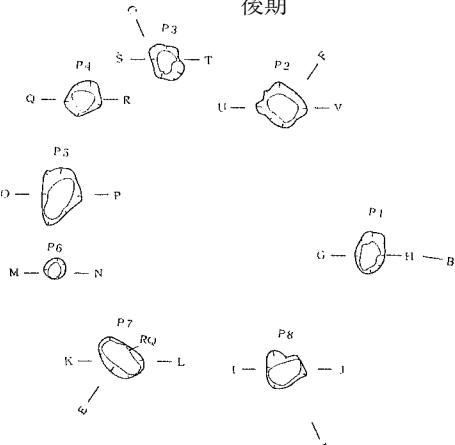
桐内C SI14B

後期



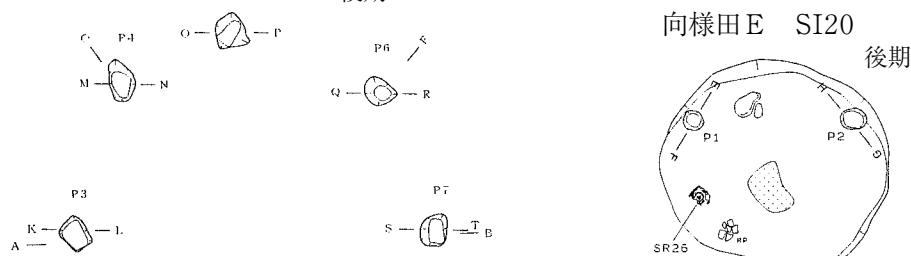
桐内C SI15B

後期



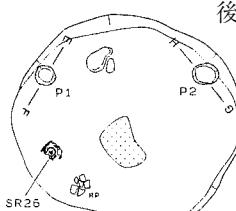
桐内C SI16B

後期

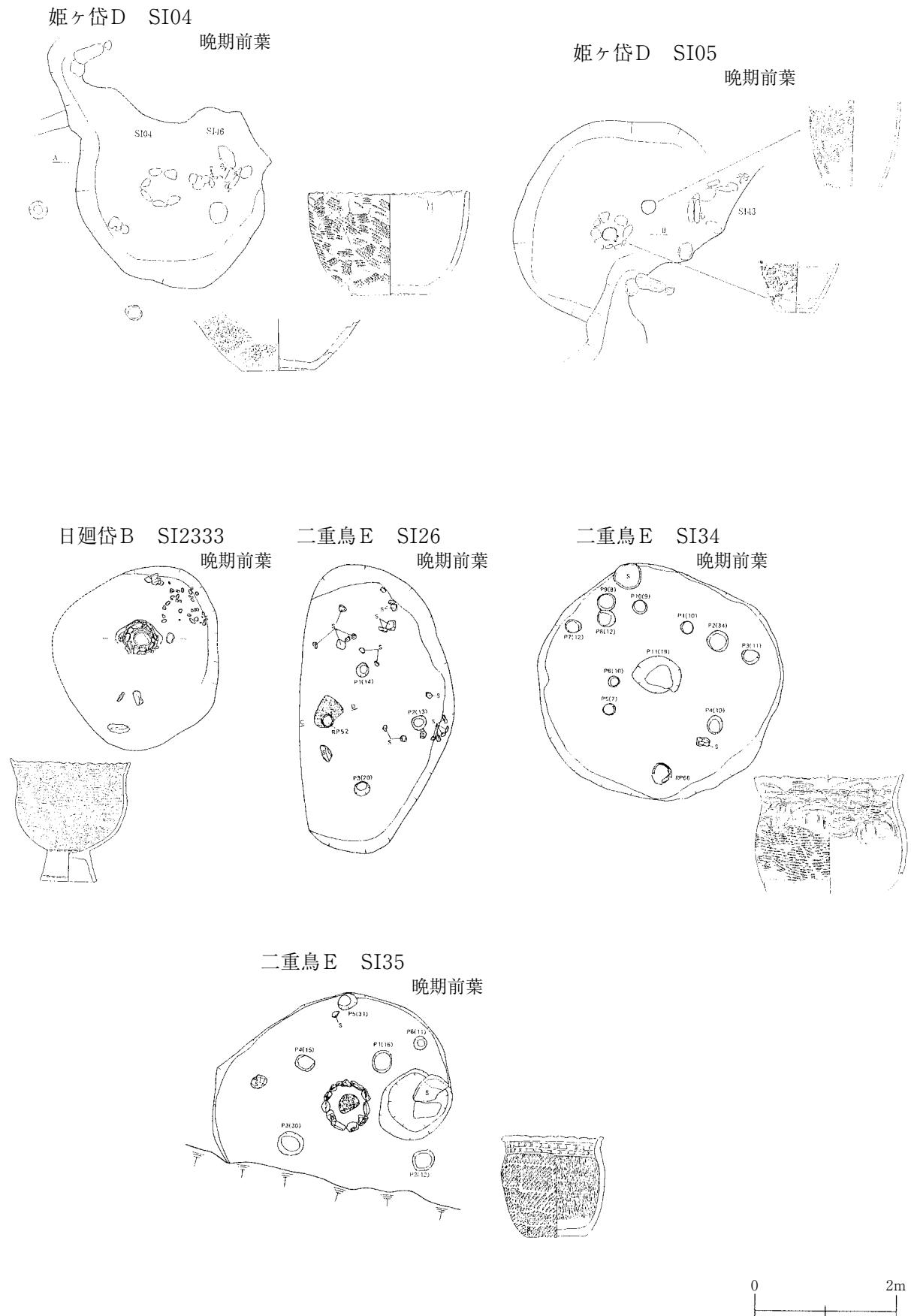


向様田E SI20

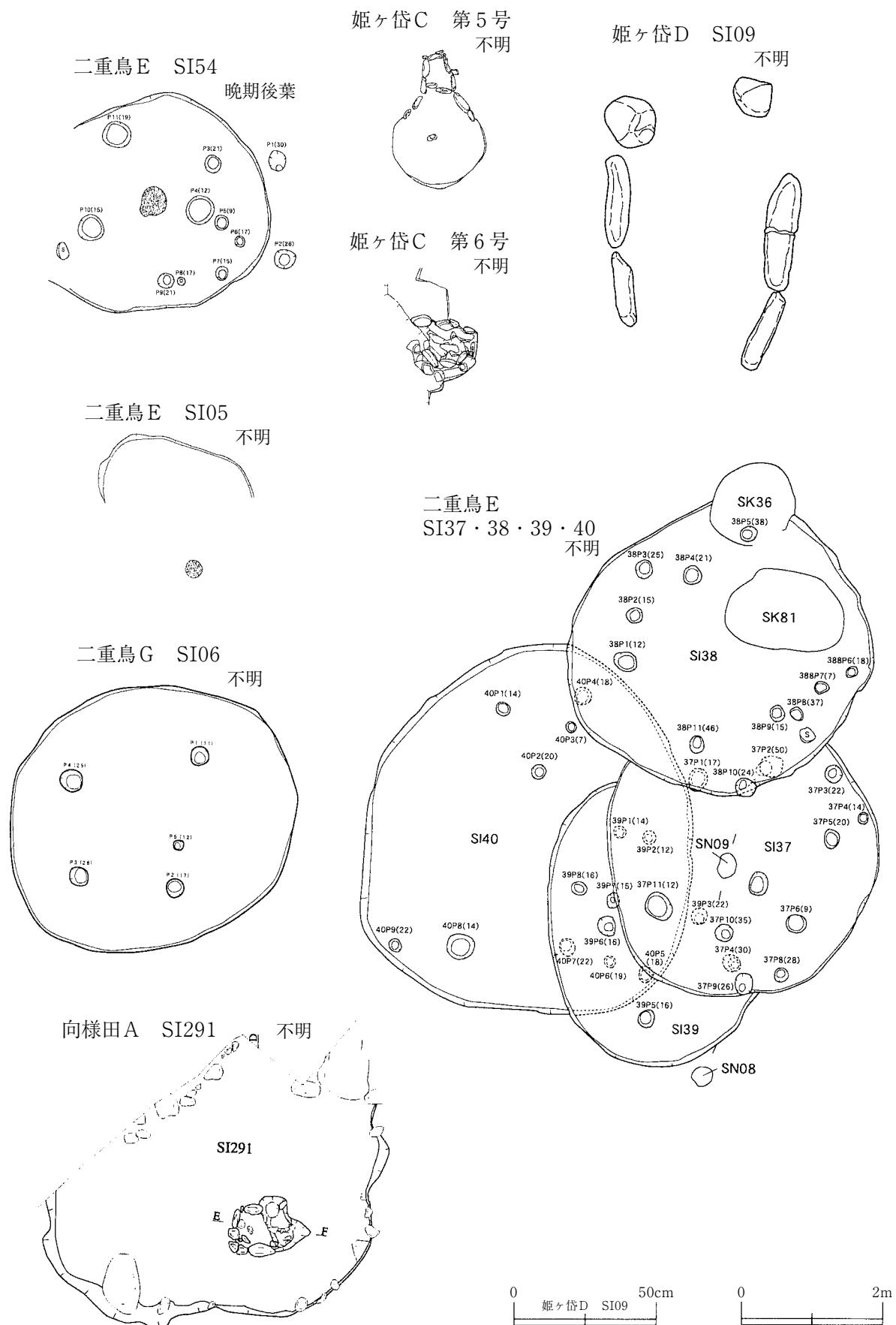
後期



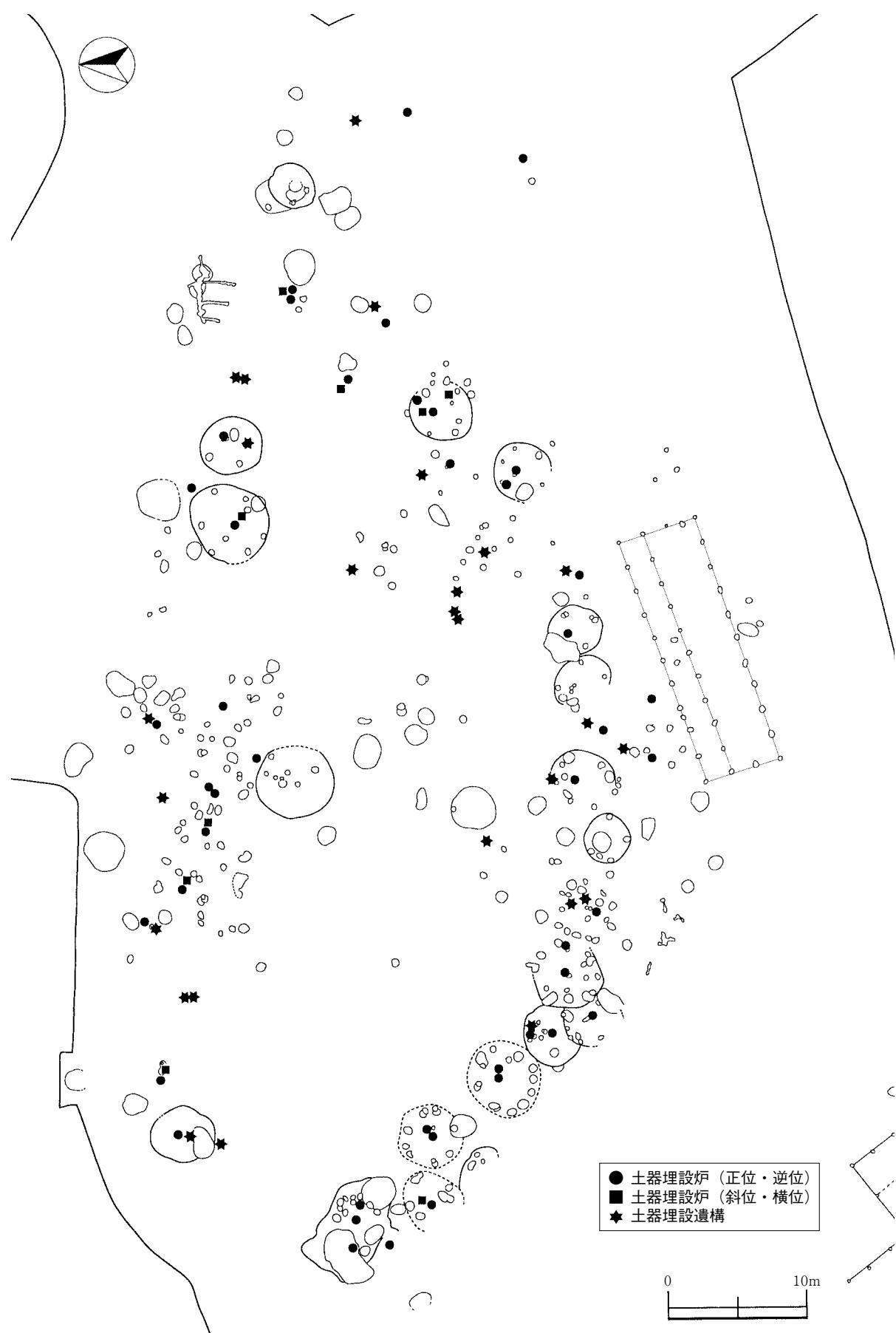
第12図 検出された竪穴住居跡



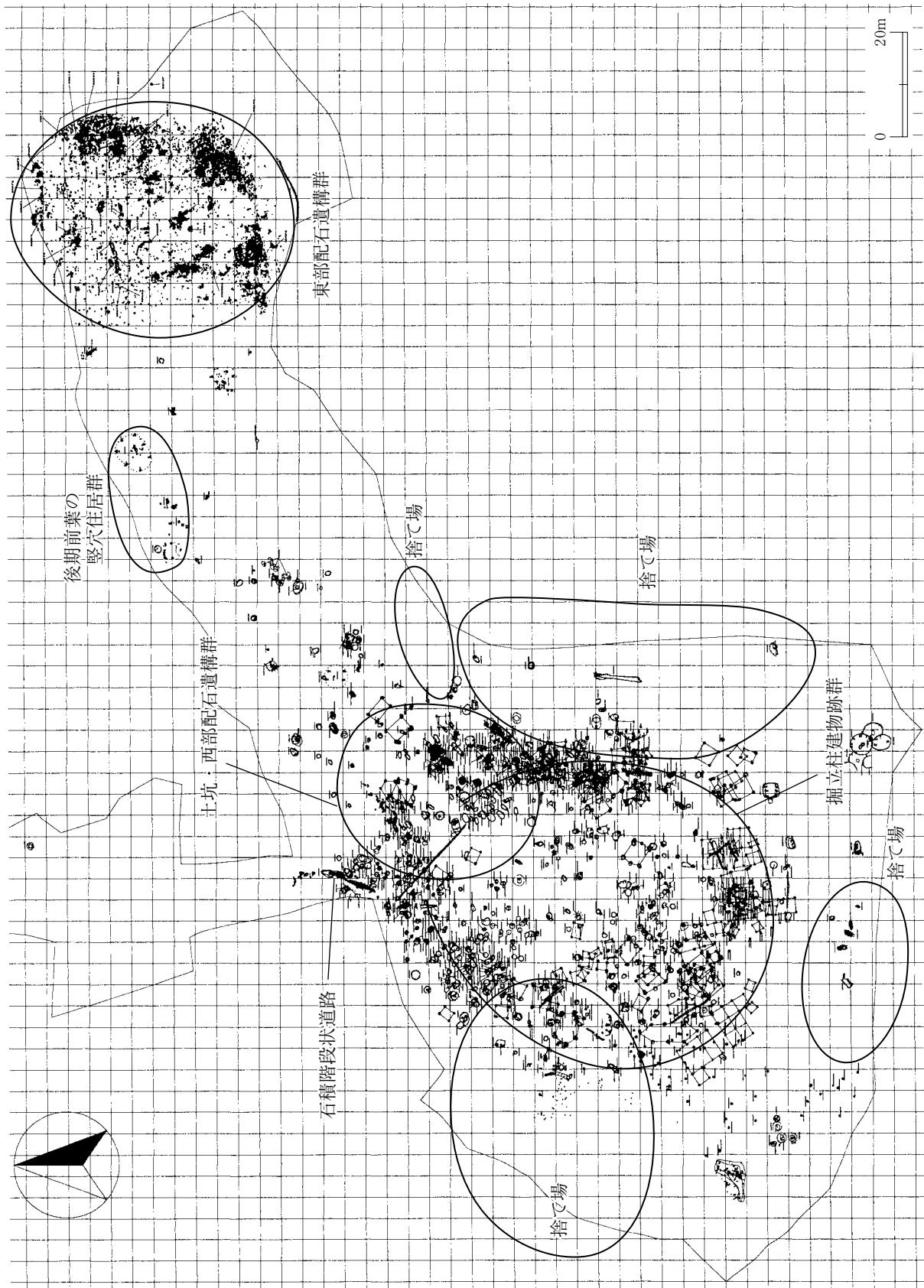
第13図 検出された豎穴住居跡



第14図 検出された竪穴住居跡



第15図 目廻岱B遺跡・遺構配置図



第16図 漆下遺跡遺構配置図

3 考察

一般的に、縄文時代中期後葉になると集落の規模が大きくなり、いわゆる環状集落も出現する。秋田県内においても、山本町の古館堤頭Ⅱ遺跡、河辺町の松木台Ⅲ遺跡などで環状集落が検出されているが、^(註10) 県北地域の米代川流域ではまだ確認されていない。小又川流域における中期の様相は、1～数軒の竪穴住居で営む小集落が点在していた。そして中期後葉になると、竪穴住居跡が検出された遺跡も検出された竪穴住居跡も増えるが、大規模な集落が形成されていた様相はない。この時期の竪穴住居には、一般的に複式炉が構築される。小集落が点在する当地域において、二重鳥C・D・E・G遺跡が存在する台地は、中期前葉から後葉にかけて脈々と集落が営まれており、検出された住居跡も30数軒と比較的大きな集落であった。

後期になると、小又川流域に分布する61遺跡のうち、50を超える遺跡で遺物が出土し、81軒の竪穴住居跡が検出されている。小又川左岸では、桐内A遺跡5軒、桐内C遺跡4軒、日廻岱B遺跡29軒、漆下遺跡15軒、二重鳥C遺跡2軒、二重鳥D遺跡12軒、二重鳥E遺跡6軒、深渡遺跡1軒、小又川右岸では、姫ヶ岱D遺跡2軒、向様田D遺跡1軒、向様田E遺跡1軒、向様田F遺跡2軒、碎渕遺跡1軒の竪穴住居跡が検出されている。この分布状況を見ると、小又川左岸の8遺跡で74軒、右岸の5遺跡で7軒の住居跡が検出されており、左岸には比較的大きな集落が、右岸には小集落が存在していたことが分かる。ちなみに、前期では小又川左岸の4遺跡で13軒、右岸の1遺跡で1軒、中期では左岸の12遺跡で47軒、右岸の6遺跡で12軒の住居跡が検出されており、前期から中期にかけても小又川左岸に集落が多く形成されている。小又川流域沿いの前期から中期までの遺跡では、前期後葉の森吉家ノ前A遺跡S I 120の大型住居跡、中期後葉の深渡遺跡S I 2001や深渡A遺跡S I 29の住居壁際に礫を配する廃絶儀礼を行った住居跡など特徴的な遺構は検出されているが、集落としての特徴的な遺跡は出現していない。しかし、後期になると、前葉に営まれた日廻岱B遺跡、後期全般にわたり営まれた漆下遺跡、後葉に営まれた二重鳥D遺跡など注目に値する遺跡が出現する。

前葉の竪穴住居跡がまとまって検出された日廻岱B遺跡は、小又川左岸の今から2～3万年前に発達した段丘上に立地しており、^(註11) 遺跡の標高は125～131mである。小又川上流約1kmには漆下遺跡と二重鳥遺跡群が位置している。日廻岱B遺跡の住居跡は遺跡北側にまとまっている。検出された住居跡は29軒であるが、土器埋設炉も20基以上検出されている。遺跡全体が昭和40～50年代のほ場整備の際に大きく削平されており、住居のプランは確認されなかったが、これらの土器埋設炉は本来竪穴住居に伴う炉と考えられる。竪穴住居跡と確認された遺構と合わせると、実に50軒もの住居が存在していたことになる。住居の配置を見ると、北側と南側に弧状に並ぶ。中央部は広場を呈し、一種の環状集落の形態を呈する。もちろん、すべての住居が同時期に存在していたわけではなく、確認された重複関係によると少なくとも4回の切り合いが認められている。一般的に環状集落か否かを論ずる際には、検出した住居跡が同時期にどのような配置で何軒程存在していたのかということが問題になろう。数軒の竪穴住居がある程度長い年月の中で建て替えをした結果、環状集落のような形態になり検出されることもあるだろうし、本来は時期差のある小単位の集落であったのが、調査結果として環状集落の形態で検出されることもある。本遺跡が一種の環状集落かどうかを検討する前に、個々の竪穴住居について考察する。遺跡全体が著しく削平を受けているためプランが不明な住居も数多くあるが、住居の平面形は円形または橢円形を基調とする。住居の床面積は、10～20m²が多く、次に20～

30 m²の順になる。住居に伴う炉の形態は、立石炉2軒、土器埋設立石炉8軒、土器埋設炉約40軒（プランが確認できなかったが、竪穴住居に伴う炉と考えられる土器埋設炉を含む）、石囲炉1、石組炉1である。炉は基本的に住居中央に構築されている。立石炉をもつ住居はS I 2007とS I 2028の2軒である。S I 2007は北東壁際に立石炉をもち、土器埋設炉（正位+斜位）が住居中央に位置する。S I 2028は、住居の2／3以上が削平を受けており詳細は不明であるが、立石炉が住居中央より北東壁際に位置している。S I 2005・2017・2025・2134 a・2134 c・S I 2338・S I 2344は、土器埋設立石炉をもつ住居である。S I 2005は住居北壁に土器埋設立石炉をもち、住居中央には土器埋設炉が構築される。S I 2001、S I 2042と重複しており、住居構築順は、S I 2005（土器埋設炉・土器埋設立石炉）→S I 2042（土器埋設炉）→S I 2001（土器埋設炉）→S I 2475（土器埋設炉）である。S I 2005と他の2軒の住居床面には約10cm程のレベル差があり、S I 2005床面が深く掘り込まれている。S I 2017は柱穴と炉の作り替えを行っており、炉の形態は土器埋設立石炉→埋設土器炉に作り替えている。S I 2025は住居ほぼ中央に土器埋設立石炉をもつ。埋設された炉体土器は、底部を打ち欠いた2個の深鉢形土器が入り子になっている。炉を作り替えた痕跡はなく、当初より土器を入れ子の状態で埋設している。S I 2134 a、S I 2134 b、S I 2134 cは重複しており、炉の形態は、すべて土器埋設立石炉である。S I 2134 cと他の2軒の住居の床面にはレベル差が生じ、S I 2134 cの床面はS I 2134 a・bより約10cm程深く掘り込まれている。S I 2338は、立石+土器埋設炉の他にもう1基土器埋設炉が構築されている。S I 2019はS I 2017同様に柱穴と炉の作り替えを行っている。炉の形態は、土器埋設炉→土器埋設炉である。S I 2228は柱穴を作り替えているが、炉の作り替えは行っていない。S I 2374とS I 2460は、横位埋設土器の下面に焼土が広がり、地床炉→土器埋設炉（正位+横位）に炉の作り替えの可能性もあるのかもしれない。炉体土器の埋設状態は、正位が約60基、逆位4基、斜位5基、横位8基であり、正位に埋設している場合が圧倒的に多い。また、底部が残存する土器が底部を打ち欠いている土器より多い。斜位または横位に埋設している土器は、正位に埋設された土器とセットになっていることが多く、これらの土器には機能差が考えられる。埋設された炉体土器はほとんどが縄文や撚糸文を施文する粗製土器であるが、S I 2007・2025・2042・2134のように文様を有する土器もある。文様を施文する土器は、細い隆線を貼り付ける土器と沈線で文様を描く土器に分けられる。S I 2025の炉体土器は、貼付による平行隆線に「ノ」の字状の単隆線が垂下する。隆線上には刺突文が巡る。S I 2007・2042・2134の炉体土器は沈線文を有する。横走する沈線で口縁部文様帯を区画し、区画内には垂下する蛇行沈線や縦位に連結する渦巻文が描かれる。これらの沈線で文様を描く土器は、岩手県湯舟沢A遺跡出土の土器と類似する。同様の文様を描く土器は、桐内A遺跡と碎渕遺跡等でも出土しているが同時期の住居跡は検出されていない。どちらの土器も型式的には十腰内1式土器以前の後期初頭に位置づけられる土器に該当する。住居内の炉の形態は、立石炉、土器埋設立石炉、土器埋設炉、石囲炉、石組炉があるが、土器埋設炉が非常に多い。炉の作り替えや住居の重複関係から、地床炉→土器埋設立石炉→土器埋設炉の形態の変化が考えられるが断定はできない。いずれにしても土器埋設炉が本遺跡においては一般的な炉の形態になる。さて、本集落が環状集落であるか否かであるが、前述したように短期間に営まれた集落であることから、ある程度の長い期間に作られた竪穴住居跡が偶然に環状集落のように並んで検出されたとは考えにくい。少なくとも広場を意識した集落形態を呈していたと思われる。住居の作り替えや重複が多いのは、何らかの

理由により居住場所が限定されていたか、住居が密集しており建て替える場所が限られていた可能性もある。このように考えると、同時期に遺構配置図のような環状集落の形態を呈していたというより、若干の時期差がある東西2単位の形態、または南北弧状の形態等の可能性が高いのかもしれない。今後同様の集落形態を呈する遺跡の発見に期待したい。

漆下遺跡は、日廻岱B遺跡同様に今から2～3万年前に発達した段丘上に立地する。遺跡の標高は135～140mであり、中央部より東側に緩やかに傾斜する。遺跡東側には、後期前葉に構築された配石遺構群がある。小礫を半円状に並べて区画し、区画内には礫を「X」字状に配し、さらにその中心から小礫を平行あるいはこれと直行させるように配した左右対称を呈する規模の大きい配石遺構や、「日」の字状に配したもの、弧状に配したもの、列状に配したもの等様々な形態をした30数基の配石遺構が構築されている。遺跡中央部には、後期全般にわたり構築された、墓と考えられる土坑やフラスコ状土坑が密集する。中央部東側には、後期中葉に構築された配石遺構群があり、その中にはいわゆる日時計状の形態を呈するものもある。これらの配石遺構は基本的に下部に掘り込みをもち、土坑墓と考えられる。この配石遺構群を中心として橜円形の土坑墓が放射状に作られている。この配石遺構群の北側斜面には、石積階段状道路が小又川に向かって延びる。この道路は、比高差5.8m、全長16mにわたり扁平な川原石を丁寧に並べている。遺跡全体には約3,000基におよぶ柱穴様ピットがあり、亀甲形や4本柱の掘立柱建物跡が約100棟遺跡を囲むようにして検出された。また、4カ所の捨て場をはじめ、遺跡全体から整理用中コンテナ3,000箱に及ぶ遺物が出土した。前葉の竪穴住居跡は、遺跡東側の配石遺構群と中央部をつなぐ細長い尾根上で5軒検出された。いずれの住居も地山まで掘り込んでおらず、床面は地山直上の黒土と考えられる。同時期の二重鳥C遺跡のS I 124の壁高は45cmであり、壁高に大きな差が見られる。炉の形態は、幅8～23cm、長さ23～64cmの細長い川原石を突き立てた、立石+土器埋設炉である。文様を有する炉体土器は、日廻岱B遺跡出土の沈線で文様を描く土器に類似する。これらの住居に関する性格等については現在整理中であり、詳細は報告書で論ずることとするが、東側の配石遺構群との関連を考える必要があるだろう。

二重鳥C遺跡のS I 39の炉の形態は石組+土器埋設炉で、住居中央やや壁寄りに構築されている。石組は、細長い礫を横位の状態で突き立て、それに添うように礫が4個配される。焼土面はこの石組と土器埋設炉の間に広がる。また、この石組と反対側にも同様の石組を配するが、埋設土器と石組の間に焼土面は検出されてない。日廻岱B遺跡や漆下遺跡の立石は細長い礫を縦位の状態で突き立てており、立石に付設する礫もない。本住居の炉は、立石+土器埋設炉のバリエーションの一つというよりは特殊な石組+土器埋設炉と考えた方が良さそうである。

中葉では、検出された住居跡も少なく、炉の形態等で特徴的なことは見いだせない。この時期の遺構・遺物は漆下遺跡で大量に発見されており、また対岸の向様田C遺跡でも十腰内2式土器がまとまって出土している。

後葉の竪穴住居跡は、27軒（向様田F遺跡の後葉から晩期初頭2軒を含む）と中葉に比べて増える。桐内A遺跡のS I 11の壁際からは、多孔底土器に入れられた香炉形土器が出土している。この住居は、石囲炉の礫の一部が抜き取られており、共に廃絶儀礼と考えられる。また、S I 37では香炉形土器が、その他の住居跡からも完形の土器が出土しており、廃絶時に土器を入れて埋め戻す習慣が伺える。出土したこれらの土器は十腰内5式土器と考えられ、炉から採取した炭化物の放射性炭素年代測定は5

軒とも 3100 B.P. 前後を示す。本遺跡の住居は、土器を入れて埋め戻す廃絶儀礼、出土土器、炭化物の放射性年代測定等から、5軒ともほぼ同時期に存在していたと考えられ、短期間に営まれた集落であることが分かる。二重鳥D遺跡と二重鳥E遺跡は、漆下遺跡の南側に位置し、標高 156 ~ 162 m の台地上に立地する。二重鳥D遺跡で検出された後葉の住居跡は 12 軒である。4 基または 5 基の主柱穴をもつ住居が多く、壁柱穴が巡る住居もある。床面積には 10 ~ 32 m² とばらつきがあるが、地山土を深く掘り下げて床面を形成している住居が多い。中でも S.I. 12 の壁高は 70 cm を測り、住居東側では貼り床を確認している。明らかな貼り床が確認されたのは本住居のみである。住居の平面形は円形または橢円形を基調としているが、S.I. 40 は東側が張り出し緩やかに傾斜する。張り出し底面に掘り込みを伴うことから、入り口とは考えにくく、祭祀に関する空間の可能性もある。炉の形態は、地床炉 4 軒、石囲炉が 7 軒である。炉はほとんどが住居中央に位置する。S.I. 38 は壁柱穴が二重に巡り、住居の増築が行われている。その際に、炉も地床炉から石囲炉に作り替えられている。S.I. 03 の石囲炉の礫の一部は抜き取られており、焼土も掻き出されている。また、S.I. 37 の石囲炉の焼土も掻き出されており、S.I. 75 の石囲炉の礫の一部は抜き取られている。これらは住居の廃絶儀礼と考えられる。住居跡からは比較的良好な遺物の出土が多く、廃絶時に置かれたものだろう。S.I. 38 と S.I. 39 は重複しており、出土遺物から S.I. 38 は十腰内 5 式期、S.I. 39 は十腰内 4 式期の所産と考えられる。その他の住居から出土した土器からも、本遺跡の住居は十腰内 4 式期から十腰内 5 式期に構築された住居であり、後葉でもある程度の時期差が見られる。隣接する二重鳥E遺跡では後葉の住居跡が 6 軒検出された。住居の床面積は 14 ~ 19 m² とほぼ同規模であり、平面形は円形または橤円形を呈する。二重鳥D遺跡の住居同様に床面までの掘り込みは深く、4 基または 5 基の主柱穴をもつが、壁柱穴が巡る住居はない。炉は住居ほぼ中央に位置し、S.I. 75 以外は地床炉である。S.I. 75 は石囲炉であり、礫が一部抜き取られている。二重鳥C・E遺跡の石囲炉をもつ住居と地床炉をもつ住居の時期差は判然としない。碎済遺跡で検出された S.I. 94 の炉は、炉の底面に礫を敷き詰めて同一個体の土器片で囲んでいる。土器片囲炉は漆下遺跡で 1 基検出されているが、時期は中期中葉であり、炉の底面には礫は敷き詰められない。また、底面に礫を敷き詰める炉は、向様田A遺跡の S.I. 200 の複式炉に見られるのみである。この炉は、石組部の底面に扁平な礫を敷き詰めている。碎済遺跡で検出した住居の炉の形態は、極めて特異な形態であり、本流域における他の遺跡での検出例はない。

晩期の堅穴住居の特徴としては、検出された住居跡が、姫ヶ岱D遺跡 2 (前葉)、日廻岱B遺跡 1 (前葉)、向様田F遺跡 2 (後期後葉～晩期初頭)、二重鳥E遺跡 4 (前葉 3 ・ 後葉 1)、深渡遺跡 1 (中葉) で、向様田F遺跡の 2 軒を含めてもわずかに 10 軒と極めて少ないことがある。また、住居の床面積が 7 ~ 14 m² と小さく、小型化する傾向が見られる。後期同様にほとんどの遺跡でこの時期の遺物が出土しており、遺跡の分布は広範囲にわたる。特に小又川右岸に位置する向様田A遺跡では晩期前半に構築された 2 基の環状配石遺構・30 数基の配石遺構・150 基以上の土坑墓と 2 箇所の盛土状の捨て場から大量の遺物が出土している。また、隣接する向様田D遺跡でも大量の遺物が出土しており、向様田C遺跡では径 3.3 m の円形を呈する配石遺構が検出されている。その他にも日廻岱A遺跡、向様田E遺跡等でも晩期の遺構が検出されている。このように、遺物の出土だけでなく遺構も相当数検出されているにもかかわらず堅穴住居の数が少ない。

二重鳥E遺跡では、前葉の住居跡が 3 軒、後葉の住居跡が 1 軒検出されている。本遺跡では後期後

葉の竪穴住居跡も6軒検出されており、後期後葉から晩期前葉に継続して営まれた集落といってよいだろう。しかし、隣接する二重鳥D遺跡では、後期後葉の住居跡が12軒検出されているが晩期の住居跡は見つかっていない。同様に、桐内A遺跡でも後期後葉の住居跡が5軒検出されているが、晩期の住居跡は検出されていない。また、住居跡を検出した遺跡でも、検出された住居跡は1・2軒と少ない。その理由の一つとしては、晩期になると後期より集落が分散化していくことが考えられる。住居も小さくなり、それに伴い1軒の住居で生活する人の数も少なくなるのだろう。集落を営むための広い空間はいらなくなり、沢のちょっとした平場ででも生活できたのだろう。前述したように、二重鳥E遺跡では、後期後葉6軒→晩期前葉3軒→晩期後葉1軒と検出された住居跡の推移に分散していく様相が見られる。しかしながら晩期になると集落がより分散化する理由は、食料の確保に関連してなのか、その他の理由によるものなのかは判然としない。次に考えられるのは、住居の構造上の変化が考えられる。具体的には、地山を掘り窪めた面を床面とするのではなく、地山面または直上の黒土が床面となり、同様に柱の掘り込みも床面までと浅くなる。そのため発掘調査において住居として確認できないのではないかということである。しかし軒数は少ないとえ地山面まで掘り窪めた住居跡も検出されており、検討を要する。もう一つは、掘立柱建物跡のように平地式の住居に変化することも考えられよう。しかし、本流域では、縄文時代を通して明らかに掘立柱建物跡が住まいとして機能したものは今のところ確認されていない。その最大の理由は、炉が検出されないことがある。漆下遺跡で検出された100棟以上の掘立柱建物跡の性格等が解明されれば、掘立柱建物跡の機能についての一つの指針にもなり得よう。このことに関しても現在整理中であり、検討中であるため詳細はさけたい。晩期最大の遺跡である向様田A遺跡では、30数基の配石遺構を検出している。その中には、竪穴住居の炉とも考えられるが床面と柱穴が確認できなかったため土器埋設石囲炉状配石遺構や祭祀に関連する焚き火を行った配石遺構としているものが半数近くもある。もしも、これらの遺構が住居に伴う炉であるならば、土器埋設石囲状配石遺構は石囲土器埋設炉、配石遺構は石囲炉ということになる。もちろん本遺跡は大規模な祭祀関連の遺跡であるため、祭祀に関連する配石遺構である可能性も高く、簡単に住居に伴う炉であるとはいえない。しかし、同様の配石遺構でも、焼土が検出されず礫に被熱痕も見られないタイプの遺構もあり機能差が見られる。向様田A遺跡の配石遺構はすべてとはいえないまでも、竪穴住居に伴う炉である可能性もあるうか。また、他の遺跡でも、床面や柱穴が検出できなかったため、屋外炉や祭祀に関連する配石遺構、焼土遺構としている遺構が数多く見られる。向様田E遺跡でも、晩期前葉の土器埋設遺構と中葉の土坑を検出し、細長い尾根状では焼土遺構も検出した。しかし、柱穴が検出されなかつことにより時代不明の焼土遺構として報告書では取り扱った。もしかしたら晩期の住居に伴う地床炉の可能性もあるうか。いかに分散化が進んだとはいえ、本流域に広がる晩期の遺跡を考えると、検出遺構と出土遺物に比べ、検出された竪穴住居の数が少なすぎる。本流域の調査はダム建設事業に伴うもので、面的に広がりを押さえて調査してきた。調査対象外であっても、遺構の分布が広がれば拡張して調査している。それにもかかわらず住居跡の検出が少ないので、やはり住居の構造上の変化を考える必要もあるう。

4 終わりに

前稿から本稿において、縄文時代の竪穴住居跡について論じてきた。本稿では後期から晩期について

述べた。まとめとして、集落の移り変わりについて若干考察する。前期から中期にかけては、特別拠点になるようなところもなくそれぞれの集落で暮らしていたのだろう。中期後葉になると小又川左岸の標高が約160mの一段高い二重鳥地区に比較的大きな集落を営み、後期前葉になると、標高約130mの日廻岱B遺跡が集落の拠点となった。同時に漆下遺跡の東側には配石遺構を伴う大規模な墓域を形成した。これらの配石遺構は、日廻岱B遺跡や点在する周りの集落から集まってきた人が共同で作ったのだろう。日廻岱B遺跡の集落は長期間は続かず、後期中葉になると集落が営まれなくなる。他の遺跡でも中葉の住居跡の検出が極めて少なくなる。住居の拠点となるような集落なくなるが、漆下遺跡には配石遺構や土坑が構築され墓域が形成され続ける。後葉になると再び二重鳥D・E遺跡に集落が形成される。漆下遺跡は後葉においても引き続き墓域として利用される。晩期においては、住居跡の検出が少ないので、構造上の変化も考えられると述べたが、中葉における住居の形態は前後の時期の住居を見ても構造上の変化は考えにくく、検出された竪穴住居跡が少ないのでどのような理由によるものなのか説明がつかない。

晩期になると向様田A遺跡を中心とする、右岸の向様田地区が中心になる。晩期前葉から中葉にかけて向様田A遺跡に大規模な共同の墓域を形成する。しかし拠点となるような集落は見あたらず、各地に点在する小集落から人々が集まってきたのだろう。後葉になるとこの墓域も忘れ去られてしまい、この後大規模な遺跡は形成されない。

このような集落の移り変わりはどのように起因するのだろうか。一つは採集等による食料確保の問題が考えられる。人口の増加や気温の変化により食糧確保が困難になり分散化せざる得ないことも考えられよう。もう一つは小又川の氾濫に起因することも考えられる。縄文時代後期の小又川の水位がどの程度なのかはっきりしていないが、住居跡が比較的まとまって検出された遺跡を見てみると、二重鳥遺跡群・森吉家ノ前A遺跡の高位段丘面（中期後葉）→日廻岱B遺跡・漆下遺跡の低位段丘面（後期前葉）→二重鳥遺跡群の高位段丘面・桐内A遺跡の低位段丘面（後期後葉）→向様田遺跡群の低位段丘面（晩期）の移り変わりを見ることができる。後期後葉になると川の流れも落ち着いて低位段丘面も安定したのだろう。ちなみに晩期後葉以降の集落に関しては検出された住居跡も少なく、出土した遺物も前葉や中葉に比べて少ない。弥生時代の遺物は若干出土しているものの竪穴住居跡の検出に関しては皆無である。

平成7年度に森吉町教育委員会により発掘調査が始まり、平成9年度からは秋田県教育委員会と森吉町教育委員会により継続してきた発掘調査もいよいよ大詰めを迎えようとしている。今年度の調査でも地蔵岱遺跡で縄文時代前期の住居跡が検出され、新たな成果が得られた。今後の調査により、さらに本流域の解明が進むことを期待したい。

- 註1 河田弘幸 「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について(1)」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号 2004(平成16)年
- 註2 文献に関しては前稿と同一であり、それ以外の文献のみ記す。文献番号については前稿の続き番号とする。
- 註3 検出された竪穴住居跡数、炉の形態等については、今年度の整理段階において変更になった遺跡もあるため、前稿の第2表とは若干相違が見られるが、本稿で訂正したこととする。
- 註4 日廻岱遺跡の報告書では、立石+地床炉を立石炉、立石+土器埋設炉を土器埋設立石炉と呼称している。
- 註5 文献10
- 註6 文献4
- 註7 文献15
- 註8 註3と同じ
- 註9 文献24
- 註10 文献25・26
- 註11 「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について(1)」の註2
- 註12 註11と同じ

文献

- 24 秋田県教育委員会 『日廻岱B遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書XV－』 秋田県文化財調査報告書 第394集 2005(平成17)年
- 25 秋田県教育委員会 『向様田D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書XIII－』 秋田県文化財調査報告書 第393集 2005(平成17)年
- 26 秋田県教育委員会 『松木台Ⅲ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書IX－』 秋田県文化財調査報告書 第326集 2001(平成13)年
- 27 秋田県教育委員会 『古館堤頭Ⅱ遺跡一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財調査報告書－』 第338集 2002(平成14)年